
鬼、恋し

” 太った猫 ”

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼、恋し

【Nコード】

N5167C

【作者名】

” 太った猫 ”

【あらすじ】

少女と鬼と呼ばれたものの交わりの物語

の異形へとその剛腕をたたきつけた。

少女は、その二つの炎の乱舞を見ていた。それが終焉し、そして鬼と少女は再び対峙し、少女と鬼の視線が一瞬交錯し、鬼は少女の傍らを通り過ぎた。

それが、始まりの物語。

桜

それは、舞い散る花弁のような散華、美しい、と禍炎は、素直に
そう思う。”神宿る”と名づけられた、その巫女の鬨いは、かくも
美しい。あの醜い魑魅魍魎をして、美しさをここに現出させる程には
鬼、それは言の葉の澱、巫女とはその事の端の檻を砕く劍、故に
ともに語らず、ただ出会った瞬間に共散らすのみ。

隔夜とその巫女が、身振りで呼ぶ、いつも通り、呼ばれた少女が
名の通りに夜を隔し、禍炎が、隠をその神火で焼く

*

夜の闇が日の光に押し戻される直前、女は目を覚ます。質素な造
りの部屋の中、その中で女性の存在だけが他を圧して存在していた。

珠のような肌とつややかな黒髪を清流で清めると、長の元へと趣
く、下げられたままの頭の向こうから下知が届く、それに疑問も抱
かずに彼女はその場に趣き、この世の穢れ、すなわち鬼を滅す。そ
れが、桜という名の巫女の役目、上の者は穢れがうつるからと彼女
に触れず、言葉すら鬼に触れると封じられ、下の者は、あまりに神
々しい姿に臆し、彼女に触れる事すら叶わず。

それが、その才を見いだされた少女であった。人に囲まれ、それ
でも彼女は、あの炎の刻より一人、とどまったままであった。

鬼といふもの

飢！！ それは飢えていた。女子供のあらわす恐怖に、悲鳴に、その幸福を不条理に奪われる男たちの絶望に、立ち向かい、そのすべてがかなわぬと知ったときの言いしれぬ虚脱に、それは飢えていた。

故に蹂躪する。立ち塞がる木々をなぎ倒し、横たわる川を飲み干し、それは蹂躪する。そこには破壊しか無い。生命ある全てを齧り尽くすまでその暴虐は終わらぬ。

八の手の一つ一つに生命を掴み、その一つをじっくりとねぶり、齧り尽くした上で蹂躪する。その絶望と恐怖は伝播し、より深き絶望を産み出すのだ。

啞呼、それは、快樂、嗚呼、それは享樂の悪夢

轟！！ それは荒れ狂う暴風雨、八の手を持つ化け物は腹の真ん中にその豪腕を叩きつけられた。

絶望と恐怖を産み出すものを掴む手が緩み、それらが逃げ出すが、当然のようにそれは、それらを一瞥ともせぬ。

疑問が浮かぶ、この鬼は何だ。と、しかし、八の手を持つ鬼の思考はそれだけ、立ち塞がるのならば、なぎ倒すのみ、それが魑魅魍魎！！

八の手が唸る。その鋭き顎が、目の前に現れた赤銅色の肌にかぶりつく、呵々と八の手の鬼が笑う。容易しと

その勝利への確信が疑問符へと変わる。八の手の豪腕は目の前の鬼を抱きしめているが、潰す事すら叶わず、その鋭き顎あごは、確かにその首筋に確と食いこんでいるが、目の前の鬼に髪の毛一筋程の変化が現れぬ。本能が警鐘を鳴らす。

鬼それが、八の手を振り解く、己に首筋に食い込む顎あごを押さえつけ、その膂力りきで、八の手の鬼の頸を引きちぎる。

だが、その程度で滅びるようでは魑魅魍魎の名に恥じる。頸は頸、身体は身体で再び鬼それに相対する。

初めて赤銅色の鬼に変化が現れる。それは歓喜、先刻、八の手の鬼が浮かべた、飢が満たされる事への渴望の歓喜

ただ、己おのが裡うちに生うじる飢えを満たす。そのためだけに在ある。それが鬼といふもの。

縁　―えにし―

鬼それに名は無い。災厄そのものがたまたま形を成しているにすぎぬと、そういう存在モリと人は言う。

しかし、鬼それは思考する。飢！　と、ただその想いに引かれるままにそのあり余る力をもって全てをなぎ払う。

鬼それに母はない。いや、遠い遠い昔の血の味きおく、あるいは、あれが母だったのだろうか、鬼それは思う。

何故？　そう問われても鬼かれに答える術すべはなく、当たり前のようにそれは災厄を振りまく。

豪こうと振るわれる腕をねじ伏せ、咆しょうと響くその雄叫をたけびを、さらなる声を持ってねじ伏せる。

飛び散る己の血に陶醉し、舞い落ちる己より強靱な生命の散華に刹那の満足を得えようと、己が同族たる鬼に終止符を打とうとした刹那。

そこに一つの朱しが現れる。豪と己に振るわれたはずの腕を宙を舞う扇のようにひらひらとかわし。伸ばした長い髪は、何かに隔絶され、蒼い炎が、今まさに己が終止符を打たんとした目の前のもう一人の鬼を滅ぼし尽くす。

鬼が鬼を凌駕し、巫女が鬼を滅すというのなら、そう、引かれあうはさだめ。

呼ばれて、そして巡り会う、それが縁、いや、それが運命えんめいといふもの。

そうして、ようよう鬼の目が巫女しりょうを捉えた。

その瞳ひとみに浮かぶのはただただ純粹たる歡喜、己を打ち負かすかも
知れぬ存在ものへのただただそれは純粹たる歡喜

そうして二人ふたつはようよう交じり合う。

交わり

灼熱の体軀たいく、爛らんと輝く双眸そうぼう、その珠たまの肌を焼く灼熱の存在、それはまさにあの時の鬼に相違無かつた。

鬼が少女を見、巫女がその前に立ちふさがる。その構図はあの時のまま、ただ、その二つが触れあえば、それはどちらかの死を現出する。

互いに声すら無く、幽世かくじよと呼ばれる短い髪の少女が、最初に、その地の抱く力を見通し己の力と成す。

それは、檻を成す力の支柱となり天と地を結ぶ、豪とふるわれる灼熱をまとった腕が少女の肌を焼く、そう思われた時にはそこに巫女の姿は無く、長き髪をふうわりとなびかせ、天上からその身に宿る力を打ち振るう。

神鳴りかみなかと思われる白き力の奔流が、鬼を襲い、ただ、声もあげず打ち倒されるのみ、それが、いままで、だからこそ、その白き光の中から現れた灼熱の鬼は驚異であった。

惚けたように、巫女まじつひめが、それを見る。あの雷いかづちを防いだ為か、その左腕は焼けこげ用を為さぬ。その左の半身はどころ崩れ落ち、死の臭いさえ発散していた。

それでも鬼それは嗤う、歓喜きんぎ歓喜と、幽世かくじよの為す結界かが鬼かれの力を削ぎ、巫女まじつひめの力を増す。それでも、未だ鬼を滅すには至らぬ。

止めた時を動かしたのは、一陣の炎、過炎かえんの炎が二人の間を通り

抜け、鬼を打つ、そうして、それが次なる戦闘たたかいの合図はじまり

殺取り

豪と振るわれる腕を、舞う綿毛のように巫女がかわし、その背後から過炎の炎が、間髪を入れずに鬼を襲う。避けようとする意志を隔世の結果が阻み、そこに桜の手が鬼に優しく触れ、神鳴を放つ、まばゆいばかりの光の乱流が鬼の身体を疾る。

びくりと鬼の身体が慄え、一瞬の遲滞の後にさらなる豪音が、桜の頬をかすめる。じくりと滲む血に怯えたのは、巫女自身ではなく隔世と呼ばれる白い髪を持つ少女、その闘いを本人達以上に把握しているのはその結界を支配する彼女であった。

優勢かに見える。桜の闘いは、嵐のように吹き荒れる暴風の中心に常に身を置くという荒技、それは、一瞬の油断が、彼女自身を舞い散る桜と化す危険な殺取り

灼熱の体躯が身体を慄わせ嗤う。それにあてられたかのように花の名を持つ巫女が艶然と微笑む、二つの魂がその交わりを歓喜とする。

産まれて以来、ふれあうモノといえは魑魅魍魎ばかり、ともに母を知らず父を知らず。触れあう魂と言えは、ともに鬼妖ばかり、鬼がもう一度、己が想いを込めて巫女を見る。巫女が、その視線に応えるかのようにしっかとその視線を捉える。

うち交わされるその想いは、恋と言うには狂おしく、そして、愛と言う程には痛ましい。

炎の色香

艶めく色は炎の色香と想える程に狂おしく、二人は交わり、恋い願う。されど終演は唐突に訪れる。

それはかつて見たことの無い、巫女の姿だった。冷厳として幻、振るわれる呪は、氷の炎の様、全ての妖異をその手に下して来た。その姿は神々しく、夢、幻の様をみるかのよう。

その類は疲れのためかそれとも別の色か、朱に染まり、肩であえぐ、彼の者が色づくなどそれはあつてはならぬ事態であった。

緻密に計算された隔夜の結界がその心を映して揺らぐ、それを見逃す鬼では無かった。豪と振るわれる腕がたおやかなる巫女の軀を弾く、とっさに張った結界は辛うじて巫女を護っていた。禍炎の炎が鬼を焼かんと果敢に打たれるが、効いた風も無い。

鬼が彼女たちを捉える。それは、刹那、永劫と思える時を現出し、そしてその重圧は不意に消える。己を制する力を無くした者に興味など無いという様に。

その巫女達の側を鬼は無人の野を行くがごとく通り抜ける。叫ばれる咆吼は未だ満たされぬ力への渴望か、それとも己を満たすかも思えた別の熱情か、鬼は未だ満たされず。

去りゆく鬼の背に注がれる視線は熱く燃ゆる。彼の者の瞳に、もはや彼女の姿は映らず。路傍の石と同じ扱いに彼女の心は千々に揺れる。

禍炎は己の無力さにうち震え、
隔夜は己が信望する巫女の色に戸
惑う。

それが二度目の逢瀬

恋し、恋し

彼は蹂躪する。飢！！ 八の腕を持つ鬼を足蹴にし、飢！！ 山のような体躯を持つ鬼を打ち倒し、飢！！ 翼持つ鬼を地に引きづり墮ろし、飢！！ 沼に潜む怪魚の腹を裂く 飢！！ 飢！！ 飢！！ 飢！！ 飢！！ 飢！！ 飢！！ 飢！！ 飢！！ 飢！！

飢！！ 未だ己の内に生じる飢えはみたされず。嗚呼、あの宴が狂おしいほどに恋しい、あのとき己のうちに目覚め 満たし始めた激情は何故か、鬼は知らず。ただ、空虚なる胸の内を埋めるために巫女の元へと疾る。

目指す者の臭いは風が血の臭いとともに、轟と啼く彼の心は未だ誰も知らず。

恋し、恋し、鬼や恋しと風の言う。恋し、恋し、鬼や恋しと虫の樂が言う。

*

隔！！ と言う音とともに、水の責めが彼女を襲う。戻った巫女に科せられるは、不定、不浄という名のざわめきと、清めという名の被落とし。

その蹂躪を彼女はあえて許す。己より卑小なる力しか持たぬ者にその身を諾とするは、苦痛ではなかった。そこにしか己の居場所は無かったのだ、ならばこそ彼女は耐えられる。

浄化の名の下に打たれる隔夜の断絶も、断縁のもとに打たれる過

炎の炎さえ彼女の芯までは至らず。ただその心に宿るは、炎の中で
まみえた鬼かれの姿

氷とさえ言われた面貌かんはせにうつすらと笑みが浮かぶ。

嗚呼、恋し、恋し、鬼や恋しと雨が言い。嗚呼、恋し恋しと草が
揺れる。

逢瀬

瀟々しやうしやうけびと煙る雨の中、鬼が顕れる。

巫女おんなに打たれた左の腕はついに成さず。

鬼かれのなす熱気しやうきに風が道を空け、雨がその巨軀きよたいを浮かびあがらせる。

たかが、一匹の化生に気づかれるはずもないという慢心は、粉と微塵に打ち砕かれる。用を成さぬ左腕を血塊かきとして、鬼それは門を打ち砕く。

轟、誰何すいかの声を挙げる暇もあらばこそ、蹂躪は、一瞬、紫のヒト型のみを残して鬼が通り過ぎる。

暗闇の中、その怜悯なる巫女まじの口の端が、内から沸く歓喜を抑えきれずにゆうっくりとゆうっくりとつり上がる。

進み行くに鬼かれの身に数多あまたの鬼を調伏てうふくした呪縄まじが、鬼に十重二十重に絡みつく、されど無人の野を行くがごとく、鬼はそれを術者ごと切り捨てる。

陰陽の僕となった怪異おにの顎を引き裂き、牙を叩き折り、そうしてがくりと膝をつく、みれば、その右の脚が気づかぬ闇に絡め取られていた。ずぶりずぶりとその身が闇の中に沈むか思った矢先、るるおう、るるおう、るるおうと鬼が啼き、当てられた者どもが一人、二人と倒れ伏し、かなわぬと思った者どもが算を乱して逃げ惑う。

鬼はそれらを一顧だにせず、ただの土塊と化した闇から己が足を引き抜き、ただ一点を見据える。その瞳に浮かぶのはいかなる思いか

その視線に応えるかのように、闇の中に巫女おんなの姿が浮かびあがる、手枷、足枷を填められ、自由とならぬその珠たまのような肌みには幾重もの傷が刻みつけられていた。

それは鬼おにと巫女おんなの三度目の逢瀬

鬼が求めるかのように、その手を伸ばす。緩やかに女が艶うるはめき、闇の中からその身の自由を取り戻す。

惑乱

闇から伸ばされた巫女おんなと鬼おにの手が絡み合い、神鳴しんめいが、炎おにの腕てが撃ち交わされる。

巫女おんなのその身しらがねが白銀しろがねに輝き、己おのが戒めをさらりとうち捨てる。

鬼が、用を成さなくなった己おのが左腕うでを貪り喰らい、灼熱あつねつに包まれる。

二人、ただ互いをその身に映し、歓喜あまねにその身を打ち震わせる。

白銀の呪力あまが鬼を打ち据える。その呪力あまの中、身体を焼かれながらも鬼が進む、白くたおやかな腕が宙を舞とびい、鬼の片眼が血に濡れる。

鏡面かがみにに映したかのように二人は己が魂を満たす愉悦そんざいに歪む。

鬼おにが己の眼にささった女の腕を喰らう。巫女おんなが、その手に持つ血塗れた鬼の眼球をくしゃりと握りつぶす。

隔夜かくな、呼ぶ声は悦楽えつらくに濡れ、過炎かえん、手招く白きその姿は闇の中、艶なまめしく、抗えず二人は再び巫女おにの手足となる。

隔夜かくなが世界を断絶し、過炎かえんが己が炎を巫女おんなに分け与える。

そうして二人は、互いの生うまれを喰らい合う。

竜巻のごとき暴風が巫女の頬を掠め、それを幸いと触れた鬼の肌

に呪力が流し込まれる。

鬼に触れられた傷口を愛おしそうに己が炎で焼き、その身に流し込まれた巫女の呪力を鬼は抱きとめる。

共に互い以外を知らず。交わり方といえはこれしか知らぬ。

炎の中に居た少女は、あの時の怪異のように蹂躪されたかったのか、その身を満たす歓喜が何かを未だ知らず。炎の中から顕れ出た鬼は、何に飢えていたのか、今この身を満たすものは何かを未だ知らず、ただただ二人求め合う。

狂乱の宴は艶やかに、そうして狂おしく。例えるならばそれは、静と動の乱舞、太陽が照らし、月が緩やかに昇る一瞬の競演、まばゆいばかりの夢をそこに現出する。

月灯りに啼く

半身を失くした鬼が地に倒れ伏し、その半身を己と鬼の血で朱に染めた巫女が歩み寄る。瀟々と瀟々と鬼の啼く、末期に巫女の姿を、臭いを、その瞳に焼き付け鬼が逝く

悄然と巫女は立ちすくむ、とくとくと流れ落ちる己が血潮にも頓着せず、立ち枯れたかのように、桜は微動だにせぬ。

飢！！ 満たされた時はあまりに短く、そうして二度とは満たされはせぬ。

そろり、そろりとその身に傷を負った術者が集まり、怪異を滅する力を集め始める。断縁の炎が、昇華の呪力が倒れ伏した鬼に集う。触れさせぬ！！ 内なる巫女の声は、呪力の乱流となって、傷ついた術者を打ち据える。

渴！！ その心の渴きは桜を狂わせる。

禍炎の炎が巫女に向かい、その炎を隔夜が隔絶する。

触れさせぬ！！ 毛筋の一本たりとも余人には触れさせぬ！！

妄執とともに流れ落ちる巫女の血潮は鬼と混じり合い、失われた半身同士、固く強く結びつき、ようよう二人は一つとなる。

渴！！ 鬼をその身の裡に取り込み、二度と逢えぬと知った心の渴きは、巫女の心を黒く染めあげる。

びょうと吹きすさぶ砂塵かせの中、そうして顕あられ出われでたるは、月灯りに啼く独りの鬼女おにめ

一度ひとたび、逢あうて、二度ふたたび、逢あうて、三度目の逢あい瀬せは恋となります。

情に狂いて、恋に咲き乱れ、女は鬼と成り果てる。

それが鬼女おにめの始まりの物語

月灯りに啼く（後書き）

言いたいこと、やりたいことは作品中でやり尽くすのであとがきつーのが、無駄な気もするんですが、とりあえずは、妖異恋 Part2をここにお送りします。その後 鬼女と成り果てた巫女がどうなったのかは、ご想像にお任せ致します。作者としてこの物語の結末はこれでおしまいです。月夜に啼く鬼の話をどこかで聞くかもしれません、それは、また別の物語。では、感想、評価お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5167c/>

鬼、恋し

2010年10月10日10時33分発行